

体中がかゆいのです

Q1 皮膚のかゆみとは？

「かゆ〜い」、皮膚科を受診する患者さんの最も多い訴えです。皮膚の「痒み」、誰もが経験したことがあるつらい症状です。「痛み」もつらい症状ですが、体中のかゆみは時にそのつらさを上回ります。「痒み」とは、「掻きたい」という欲求」または「ひっかき反射」を引き起こす感覚、と定義されています。ええ？、何それ！実際、言葉で言い表すことが難しいのが痒みですね。もっとも原始的な痒みはダニや虫によるものではないかと考えられています。つまり、痒みの原因となるダニや虫を掻くことで排除することが目的です。痒

いところを掻いたときの気持ちよさ、これも誰もが経験したことがあると思います。それは、ダニや虫の排除という目的を達成させるためのご褒美なのかもしれません。しかし現代の痒みは、掻いただけで原因を除去できないような単純なものばかりではないので、適切な診断・治療が必要です。

Q2 皮膚のかゆみの原因は？

かぶれ(接触皮膚炎)や虫刺されなどは代表的な痒みの原因です。慢性に体中がかゆい場合、発疹があれば、その発疹が何かを診断することが重要です。アトピー性皮膚炎、慢性痒疹、慢性蕁麻疹などが代表的なかゆみ

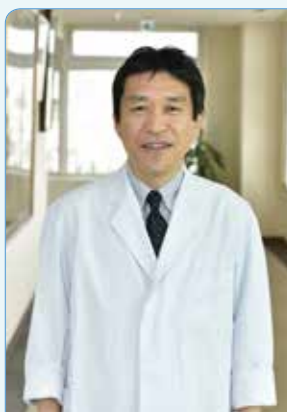


を引き起こす皮膚疾患です。ヒゼンダニが皮膚に寄生する「疥癬」は、慢性湿疹との区別がつきにくい場合があり注意が必要な疾患です。一方、皮膚になにも発疹がないのに痒い場合を皮膚その痒症といつて、その原因を探さないといけません。一番多いのはドライスキンで、特に高齢者に多くみられます。しかし、保湿クリームを使っても改善しない、あるいはドライスキンが全く認められない場合は、痒みの基礎疾患がないか調べる必要があります。腎臓病(特に透析中の方)、肝臓病、糖尿病、甲状腺機能低下症などの内臓疾患、妊娠、薬剤などが原因となりえます。薬剤には健康食品やサプリメントなども含めて考えます。また、白血病や胃がんなど、悪性腫瘍が隠れている場合もあり注意が必要です。しかし、いくら調べても原因がはつきりしない「原因不明の慢性その痒症」CPUO」が結構あるのも現状です。

Q3 痒みの対策

原因となる皮膚疾患があれば、

その治療が第一です。通常抗ヒスタミン薬の内服を併用しますが、抗ヒスタミン薬が効きにくい痒みがあります。例えば、アトピー性皮膚炎。皮膚の状態が一見よくなってもじつこい痒みが残る事があります。最近、そういう痒みにも非常に有効な注射薬(ミチーガ)がでています。皮膚に症状がない場合、まず保湿クリームは試して下さいましょう。内臓疾患が原因の場合は、内臓疾患の治療が第一ですが、慢性肝疾患や透析中の腎臓病患者の痒みに抗ヒスタミン薬は効果不十分で、ヒミッチという有効な飲み薬があります。スキンケアの視点で注意すべきこともあります。入浴、シャワーでは石鹸・シャンプーはよく泡立て決して強く擦らない(できればタオルは使わない)、十分にすすぐ、ぬるめの湯を使う、などです。入浴時に、擦ると気持ちいいという誘惑に負けないようにつることも重要です。室温は適温・適湿に保つ、新しい肌着は使う前に水洗いをする、という点も重要です。



今月の先生 岐阜市民病院 皮膚科 加納 宏行

○専門分野

アレルギー、膠原病、皮膚潰瘍・褥瘡、皮膚科疾患全般

○役職

皮膚科部長

○主な資格、認定

日本皮膚科学会認定専門医
日本アレルギー学会認定専門医
日本褥瘡学会認定褥瘡医師
岐阜大学医学部客員臨床系医学教授

○卒業年、主な職歴

昭和63年岐阜大学医学部卒
米国ハワード・ヒューズ医学研究所・博士研究員
土岐市立総合病院・部長
岐阜大学大学院医学系研究科皮膚病態学・准教授